

◆池田亮二 選 ～絵手紙で振り返る令和二年～

七、城代家老が殿様に

顔見世の殿さま役者化粧濃し



トランプ氏ほど傲岸不遜でなく、前総理ほど厚かましく大ボラを吹くでもなく、もともと忠実な番頭役だったが、なりゆきで殿様になろうとするからには、大見得もきらなければならぬ。坊ちゃん育ちの世襲ではないから、容姿もどことなく野暮ったく、白塗りはどうもノリが悪い。

台詞も音吐朗朗なめらかにはいかない。ウソっぽい台詞を弁慶の勸進帳のように堂々と言ったのける図太さはなさそうだし、白浪五人男のように悪ぶってみせることなど論外だ。

プロンプターの言葉を一生懸命なぞるばかり。それでも幸い、まわりが稽古不足の大根役者ばかりだったせいで、めでたく顔見世興行はきり抜け、トップの座を射止めたのだ。

さて、大向うをうならせることができるか。紙つぶてがとぶか。

八、社会距離というバリアー

接触禁止新型モードでごきげんよう



動物には臨界距離という距離感があって、警戒する敵から逃げ出す距離、親しい相手に接近する距離を計りながら暮らしているという。

人間も、友人、男女、上司と部下などの間でふさわしい距離を保ちながら生活している。親が子を叱る距離、男が女に言い寄る距離、それぞれの距離によって、声の大きさ、抑揚、ゼスチャーも微妙に変わる。接近するほど親近感も濃くなり、離れるほど疎遠になる。そして、一旦疎遠になると、親しい関係にもどることは難しくもなるとか。

ところが、これらの距離がコロナ対応ということでご破算になり、人間行動の経験則を無視した一メートルとか二メートルという社会距離ですべて律せられるようになってしまった。握手もハグもできなくなって、親子や恋人同士のスキンシップまで薄れてしまう。挨拶のしぐさ、喜怒哀楽を表現するためのジェスチャーを新たにつくらなくてはならない。

テレワークやテレ学習は、皮膚感覚、接触感覚とは無縁であり、このままでは本当に味気ない世の中になってしまう。

九、政界有為転変

割れ鍋を繕いおでんの具沢山



九月十五日、立憲民主、国民民主党などの党が合流し、政権奪取をねらうべく新・立憲民主党が発足した。めでたしというところだが、実はこれ、三年前に壊れた鍋を継ぎ合わせた再生品である。今世紀に入って二十年の間に現われたり消えたりした野党は、日本新党、新生党、さきがけ、新進党、太陽党、民政党、みんなの党、希望の党、維新の党、新党大地、次世代の党、等々で約二十ほどにもなる。

まさに「よどみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまらず…」である。繕った鍋に集まったのは、右は元自民党の大物から、左は元社会党の闘士まで、バツ一、バツ二、バツ三…の面々。

年配の人ならかつて人気の武者小路実篤の画賛を覚えているだろう。じゃがいもやトマト、ピーマンなどを並べた絵に、「君は君、我は我なりされど仲よき」とか、あるいは「仲よき事は美しき哉」の言葉を添えた作品である。願わくは、大根、こんにゃく、たこなどの具沢山がけんかして、また鍋を壊さないことを。